

地域主体の避難所運営で、避難者が一体となって頑張った



ただお 吉田 忠雄さん
(元赤崎地区公民館長)

リーダーとして、避難者に、安心感を与え、納得を得ることを心がけた

私は、震災当時、赤崎地区公民館の館長でした。3月11日の夜、漁村センターには300人程が避難していました。本来、避難所の運営は、行政が中心になって行いますが、市の職員から、「バックアップするから、地域の人が安心してきるよう、吉田さんにリーダーの役割を担って欲しい。」と話され、引き受けました。まず、避難所の秩序を保つために、衛生、食料調達等の7つの係と、そのリーダーを決めました。各リーダーには自分の補佐役を5人選任する

よう指示し、祭り用の手ぬぐいで作った腕章を付けさせました。

12日の朝、避難者全員を集め、朝礼を行い、今後の避難所の運営体制について説明しました。それからは、朝礼を欠かさず行いました。冗談を言っ、なるべく皆を安心させるよう気を配ったり、その日の日程や支給される物品などについて丁寧に説明するなど、情報を共有することで皆が納得するよう心がけました。

「地域が役所を動かしているのだ」と思っ、って一体となった

避難所生活は、4か月にわたりましたが、大きな事故もトラブルもありませんでした。住民が主体となって避難所を運営して良かったと思っています。そうでなければ、何事も人任せにして、自分ではよく考えることもせずに、何か不満があったら役所のせいにしたかもしれない。けれど、私たちは、むしろ役所を動かしているのは地域だと思っ、皆で頑張りました。

消防団は、一丸となって、捜索・警備活動に奮闘した



まさひろ 大田 昌広さん
(大船渡市消防団長)

県外の救援隊、国際救助隊の支援を受けて踏ん張った

震災当時、私は、消防団第2分団第1部の部長でした。消防団は、発災直後から生存者の捜索活動を行いました。私は、大船渡町内を声かけしながら歩きましたが、発見できた生存者は、お一人だけでした。多くのご遺体を発見し、その度に、警察に報告しました。

私が所属した第2分団は、津波により、全ての消防屯所を失い、大船渡地区公民館を拠点とした活動を余儀なくされました。団員のなかには、家族を亡くしたり、自宅が被

災した人も少なくなく、精神状態は極限に近かったと思います。しかし、多くの団員がまちや人のために思っ、活動しました。また、県外の救援隊や、国際救助隊が支援に来て、ともに同じ思いを抱いて活動してくれていることを励みに、踏ん張ることができました。

消防団は正義と勇気、そしてまちを愛する気持ちで活動している

消防団員は、正しいことを行う勇氣を持ち、自分たちの故郷を守る、「義勇愛郷」の精神で活動しています。私も、大船渡が好きで、まちの発展のために、地域を守らなければならぬと思っ、活動を続けてきました。

震災後は、特にその使命感に駆られました。消防団の指揮系統のもと、この緊急時に、即戦力として使命を果たし切ったことを誇りに思っています。



自衛隊とともに捜索活動をする消防団員



大船渡市消防団
公式ツイッター
※活動内容が確認できます



支援の医師に医療相談する避難者
避難所の入り口には、食事時間等の連絡事項が大きく書かれていた



漁村センターにあった祭り用手ぬぐいで作成した腕章
※避難した女性たちが手作りした